

当事者が支援するということ：

専門職支援との対比調査に向けて

成城大学 南 保輔

1 目的

薬物依存者の自助回復組織ダルクの当事者スタッフの「回復」に、スタッフであることがどのように関係（feature/factor in）しているのかを検討する。薬物依存者の「回復」は、依存経験と回復経験からなる。当事者は双方の経験があるが、専門職は一般的に回復支援経験という、後者の支援者版のみを有する。当事者支援と対比して、専門職による支援の特質解明（科研 17K04154）の端緒とすることをめざす。

2 方法

ダルク研究会は、2013年4月からの4年間の調査（科研 25380698）で、大都市圏にある2つのダルクを訪問し11人のダルクスタッフにのべ148回のインタビューを実施した。以下に協力者の基本情報一覧を示す。

| 仮名 | 主な依存物質 | スタッフ歴 | 調査回数 | 仮名 | 主な依存物質 | スタッフ歴 | 調査回数 |
|----|--------|-------|------|----|--------|-------|------|
| A | 覚せい剤 | 22年 | 10回 | F | 覚せい剤 | 4年 | 5回 |
| B | 覚せい剤 | 22年 | 3回 | G | 咳止め薬 | 4年 | 4回 |
| C | 咳止め薬 | 22年 | 6回 | H | 咳止め薬 | 2年 | 16回 |
| D | 覚せい剤 | 9年 | 19回 | I | 覚せい剤 | - | 6回 |
| E | アルコール | 6年 | 6回 | J | 覚せい剤 | - | 3回 |
| N | 咳止め薬 | 6年 | 2回 | | | | |

3 結果

スタッフになるにあたって、強く希望したひとと「流れ」でスタッフになったひとがいた。全員が、スタッフをすることは自身の「回復」につながると感じていた。ダルクにつながるまえの薬物依存経験は、スタッフとならなかったほかのダルク利用者と比べてとりわけ深刻ということはないようであった（cf. ダルク研究会 2013）。ヴェテランスタッフがスタッフになったころは、全国のダルクの数は少なく、薬物依存への政策もかぎられていた。当時の厚生大臣に陳情に行ったスタッフもいた。ダルクと密接な関係にあるNA（ナルコティクスアノニマス）という自助組織の活動に熱心なのは、昔のスタッフと今の新しいスタッフに共通していた。

スタッフは、利用者に「背中を見せる」ことが期待されており、このことが薬物使用にたいするひとつの歯止めとなっていた。薬物への欲求に苦しむ利用者の様子を間近に見ることは、かつての自分の姿を思い出す機会となっていた。利用者から頼りにされて、アドバイスが受けとめられることにスタッフとしての手応えを感じていた。12ステップの学びを進める圧力が不断にあった。薬物依存者の回復は、断薬とスピリチュアルな成長とからなるとされているが、新米スタッフは、これを実践するのにスタッフであることはありがたい環境だと感じていた。

他方、利用者との関係についての悩みといった、ダルクやNAミーティングで話すことができない内容をかかえることもあった。支援者のみのミーティングを組織してそこで話したり、自身のNAスポンサーに話すなどして、この問題に対応していた。

また、依存薬物の種類によって回復の軌跡などが違うために、自分の依存したのとは別の薬物の利用者への対応に悩むスタッフもいた。さらに、最近増加していると言われる、なんらかの障害を抱えている利用者などへの対応を課題と挙げるスタッフもいた。

4 文献

ダルク研究会, 2013, 『ダルクの日々：薬物依存者たちの生活と人生』知玄舎。

_____, (近刊) 『当事者が支援するということ：ダルクの日々パート II』春秋社。